

南
北

太平記圖考

三編

貳

伊13
1989
15



門 15
編 1389
卷 15

參議從三位兼武藏守源尊氏
新田左中將源義貞
楠左近衛中將正成
結城親光

南北大平記圖會卷之十四上

三篇

目錄

恐逆鱗尊氏奉奏狀
義貞隱謀欲害正成
奉奏狀義貞請征尊氏
諸卿議新田足利確執
候禁闕正成述忠言
正成關東進發望搦手
賜宣言義貞進發鎌倉
諸國武士競服尊氏
隔矢矯川義貞與直義戰



公綱大進破足利勢

義貞渡手越河破直義

上杉重能偽論旨激將軍

兩軍大戰箱根竹下

搦手破大友塩冶變心

南北太平記圖會卷之十四上

三篇

恐逆鱗尊氏奉奏狀

義貞隱謀欲害正成

扱とらも今度尊たう氏相あひま損と次郎時行ときゆきが討手うちてを兼かねて關東かんとうを平ならげて後今のちいま隱謀いんぼう
 の企くわわゆる由風ゆふう聞きはささままい尊たう氏兄弟しやうてい去いる元弘げんこうの乱らんの時鎌倉かまくらを打立うちたてり
 天下てんかを奪うばふの望のぞわり然しかども朝敵あそくとああるまでああわららず頼朝よりともの行ゆきを真似まねび
 是こゝも同おなじから人事じんじを思おもへり然しかども今の朝家あそけ少すく大塔官おほたか御ご在上じやうじやう新田北畠しんてんきたはた
 楠結城名和等宗徒くすのきむらたななはたしやうむねとの勇士ゆうし有あり意いふ任まかせむ結むすぶ大塔官おほたか御ご尊氏たうしを討うち
 んとして諸國しよこくへ御教書ごかうしょをたたるる一家いけの滅亡めつじやう難遁事なんとんじをのこ心こゝろは掛かけ
 らるる今宮いまみやかくちちせ給たまひつつまま我われ小ここそ諸國しよこくの兵へい隨したがひぬぬんと思おもれ
 所ところは新田楠等朝小しんてんくすのなみちらうち在ありて動うごまま目覚めれれ度どをのこ申まをるる彼等かれらが朝家あそけ
 小こああらん程ほども當家あうけ天下てんかの權けんを取事とるじへ成間なりまどききなり如何いかももして彼かれ

を失ひんと一族後臣の者共縋り討せしめむらむ。又今度相模
 次郎を亡く後東國の兵皆我等兄弟に随ひると被思ふ
 新田を引人有て所々領内せり合の軍あま思ひの外の事うま
 眉を雑をせよせしむる依之俄に謀を設け東國へ申ふ不及南海西
 海山陰山陽追軍勢催促の御教書を被下り我隠謀の企内ふ在と
 いども外へ不出軍勢を催促する事新田と戦んとの手だてあり。又
 此事ふ付て直義謀あり諸國の軍勢當家ふ随ひ新田を追討して
 後楠公向ふ若随ふ軍勢なく上聞小達して勅許の御討ひを仰
 ぐんとあり最賢きやうあり聞えけしども朝家をさし奉るを見付ざ
 りこそ拙きけし然とも諸國に御教書を受たり者足利殿朝家を恨
 奉るべき度有て天下又武家の有とありんと私語るが早く上聞
 小達して主上逆鱗まじり継令是すでの忠功莫太ありとし不義を

重なる逆臣くるべき条勿論なり則追討宣言を可被下と宣ひたり
 を諸卿僉議有て尊氏が不義殿聞に達せしめども未知其實罪の
 疑なきを以て功の減あるを被弁責と仁政ありと親房公明志
 まり小諫言を被奏しうばさる法勝寺の慧鎮を鎌倉へ下し事の
 様を可尋とて其日の評議に定まり既小隠謀此風聞上聞に達せ
 ざり前小結城親光楠正成此事を被下りければ正成答云甚も四五日
 以前より兼あり然とも新田足利互小恨を結ばるの同其事
 りて侍人又伊丹十郎兵衛重継と申者其某が分國に在しけるを
 足利殿より軍勢催促の御教書を被成り参んと申たり御存知の如
 く河州攝州の事其某守護の國にて侍まふ足利殿より御催促を心得
 ぬ彼者も其某申聞する事無して参んと申条朝の御事を輕申
 故ちり是隠謀の大逆なりト侍人と存て家の子共申付て

義貞隠謀
正成と
害せん
議とる
図



を千劔破へ呼よせ無左右討果させては足利殿故に某も紀國人
 一人失ふてひと夏もかひは被申る親光さては尊氏が隠謀重疊せ
 りとて大小驚く気色あり捕いざと驚紀ゆひそ新田と戦んたわめ
 ぞ緒國の軍勢をば招き申さるるん此後ハ定て上聞は達まべ彼
 両家の内一家ハ朝敵とるるん義貞も尊氏も良臣とい謂かては
 教く所はあらむと申さるるるが果して其言の如し是ハ叔を法勝
 寺の慧鎮上人奉勅関東へ下らんとせらるるがその日尊氏より細
 川阿波守和氏を使ひて一紙の奏状を被捧る其文曰
 参議從三位兼武藏守源朝臣尊氏誠恐誠惶謹言

請早誅罰義貞朝臣一類致天下泰平状

右謹考社代列聖德四海無不賞顯其忠罰當其罪若其道
 違則終雖建草創遂不得守文肆君子所慎庸愚所輕也去

元弘之初東藩武臣恣振逆威頻無朝憲禍亂起于茲國家
 不獲安爰尊氏以不肖之身麾同志之師自是定死於一途
 士運倒戈之志ト勝於兩端輩有與義之誠聿振臂致一戰
 之日得勝於瞬目之中攘敵於京畿之外此時義貞朝臣有
 忿難助之貪心戮鳥使之急課其罪大而無撓通身不獲止
 起不慮尊氏已於洛陽聞退逆徒之履虎尾就魚麗義貞始
 以誅朝敵為名而其實在窮鼠却啗猫鬪雀不辭人斯日義
 貞三戰不得勝屈而欲守城深壁之處尊氏長男義詮為三
 歲幼稚大將起下野國其威動遠近義卒不招馳加義貞囊
 沙背水之謀一成而大得破敵是則戰雖在他功隱在我而
 義貞掠上聞貪抽賞忘下愚望大官世殘賊國蠹害也不可
 不誅之今尊氏再為鎮先亡之餘殃久苦東征之間佞臣在

朝諛口乱真見偏生於義貞阿黨裏豈非趙高謀内章耶降
楚之謂乎大逆之基可莫甚於是焉兆前掩乱武將巧全備
也乾臨早被下勅許誅伐彼逆類將致海内之安静不堪懇
歎之至尊氏誠惶誠恐謹言

建武二年十月日

如斯尊氏被奉奏狀一夏の未だ隠謀上聞は達せざる以前は准后よ
京中の取沙汰不宣如何も心元なりと被仰又公卿等の尊
氏志ある人も密使を下して捕伊丹を誅したりるんど被告た
りたり尊氏兄弟廷臣どもの仰天大形なら次仁木細川の人々の師
直義忽の行ひと毎度ある故なりと洗々尊氏ハ軍勢催促の直
義師直思慮る紀義ありかんど被申て左と思ひ紀評議ハ一決も
なり只先直義朝臣御上洛あつて種々小事の様を准后まで申させ

まへと申者もあり又兄弟打はまて御上洛被為在はと申者もあ
るが替くあつて師直進み出て申けり唯運を天に任せ打破て
御覧は諸國の武士公家の成敗を善とせむと覚公思ひ立ちて天
下の士皆御方と参らんともを申直義のさよ我も左こそ思ひ
つまども東国の内にも新田はあひ付者も多し天下の夏一人の思ふ
やうふならんや先可成わど准后を奉憑新田が非を奉朝家の威を
後み當て新田を追討し其後の夏に重て評議を加へんとわりし
一座此夏も月先直義の有りかんと申ひまども直義少くも臆し
ころらん自ら上りたらん且若大塔の官の事など露頭あらんをむ
ころまなれ其罷り上りしとも月夏なり只一紙の奏状を捧て敷慮の
趣をも可心得とて細川を上り被申る此奏状のまご内覧も不被
下けまへ遍く知る人もなるとける爰も新田左兵衛督義貞も所々の軍

且打勝ぬ今の朝敵とあるとも日本は大半我れぞ随ふらんともを被
 思ふまは強ち不發ち氣色もなかりけりかはまが大事なれむ此度の評議
 のまありと御在りしほどに評議様もまをきて一様あり由良新左衛
 門申らるる當家の度准后のうてあらん程ハ終めの朝敵と成りて侍
 ぶまら只今の朝家ハ正成一人のまをくあそ侍ま呼よせりひて是を
 刺殺し赤松入道父子ハ朝家ハ怒あるものなるま播磨一國を被下て
 味方とあり残りハ武士ハ物の用ハ不可立とぞん侍ま君をバ押こ
 奉りて持明院殿を取立すのせりへは然らば尊氏兄弟ハ東國まで殊
 せし侍りらんハ何条度のひききと事ハなごぬ伸ころハま義貞それ
 ハ世の人口も如何と思ふぞ其上楠ととも義貞ハ親けま人倫の
 是行ひふありばと被申しを由良重と申す尊氏の躰を能く考へ
 るハ朝を奉恨と今ぬあるべし當家より先ハ事を起りひたハ大ハ利

有べしと義貞云尊氏が勇こそ知まはたは何あどの事り有なま
 義貞が朝ぬわらん程ハ維久勇を心まかけん者共大臆病の者共ハ
 与まら度わらんや不如船田ハ不ぞ彼せんそ船田入道を呼よせ此
 事を被申らるに船田云最ハ天の与まらを取とのぬ今ハ朝家の
 御政悪きよ依て天下の人民苦之國の為ハ不義を亡さるそ善道
 よそひと申しけまはさるハ楠を呼よて其用意をせらる楠ハ智謀勝
 る上ハ武術力量双なき勇士なるべとて与手ハ粟生篠塚畑互理
 由良等より斯て三日己前ハ義貞楠の宿所ハ行何とぞ世の中の
 事ども語よて歸らまら其後使を以て楠を呼よまらる正成己ハ
 これを察して返答被申らる様ハ仰義ハ併ハ當時世の中強ハ殊
 一ハ一方の司ハ和殿なるべし某ハ兔ハ角ハ朝家の臣よて侍ま朝敵
 とわらん人よそそ矢の一筋を射侍らんままはつやの乱が死時

少の尊氏招うれはとも参る間づくは上へ和殿へも参るほきまては御用ご
 あらんま侍よ仰て被申越ひへ可兼と答て不参義貞よては楠此更
 を知てかく申やと申さまさるる多ふ船田入道よも存へ仕る間づくは某御使
 として多り可申様のいとて聽て楠の方よ行と正成又對面へ楠公義
 貞申せとい東國の事尊氏朝敵となる条疑かゝ國の危きを見と
 不練の臣の道よあつた此更上聞よ達して義貞不日は罷下るべく存
 じは去かたう朝へ申上たらんま例の准後の尊氏御具旨よ依て義貞
 が申条却て不忠と成りうん事をのど歎き且へ朝家の御為且へ面
 面の家の為めていへ奥底なく御異見を得るると申は多ふ楠船田が
 顔を一一と見と實此程へ緒事よ御心よりうらやとこそ存
 其更の御沙汰難有去たう船田殿よ旨趣を可残よあさるる申
 侍るなり義貞夫あは君の御事を思召まてくと存此頃へ御

恨の程いにも頭まきせめひたると正成へありひ成ていへ人のよも見
 まのせいほはけき某々様の事を申へ佞奸身よ余りて申たご思ひ
 むらんるま今更申さるる入道殿よ申へ偏よ新田殿よ申し同様
 候其上所々國々の戦よ新田の人々打負ひひつりとも聞え程は總令
 朝敵となるとも不苦思ひひつりと存へ先日此方へ入来りぬひ
 と何よりも氣色よく御物語ありしよ今日又正成を呼ぬ更不審
 の一ツよ是程の小事よて密更よあはるる貴辺御出有て某は終
 ぜらんまきぬたへたじと今日呼ぬよと不審の二ツよ又是れよ事
 御思慮あるまは新田殿よても不侍誠よ押て御下向有朝敵の
 名を得ぬあべ。奏聞を延らまはば准后のおうして妨あるな。何
 とも分別し難きことぞし某ととも如何いまべき成まじき更を被
 しめよ仍て大よ不審起る先よありくしき御返事を申たご

む義貞も御腹を立ちらるべき処は左もあらざるに猶以て不審あり向後
 とて私乃宿意へ不待足利新田両家の確執の止ざらん程へ主上を守
 護し奉て甚と用心能はるより外の可有とも不存はとて最不與
 るる躰るれを。船田もさそふ此事察せしむたりといひ思ひかたがるる恐
 しき者そ左あらぬ躰にめてた。楠公の御身も對して當時義貞
 子何の御用心侍りなん成るも世上強々も左も思召侍らん義貞
 心中は別は替る可侍とて歸りぬる。後めて楠恩地を呼寄てさ
 まばよ此者ども隠謀を企ち条疑なき。某を呼つらへ隠謀は組せよ
 と云ふ不然を某を討とら忽ち天下を一時に覆さんと思ふぬぞあ
 らん凡そ色は出して船田は申らるる一言も咎む左あらぬ体
 と歸りぬ如何さぬ天下は事出来んも言はるる淺間もさ世の中を君
 の御事も准後の御口入に依て御政の悪けき御代も末もぞ成なん

両家の内必も一家の朝敵とならん朝敵とたりたる者天下を可奪
 諸國の武士朝の政を悪んばもならんされども某が軍の術もどる
 官軍隨ち天下を無左右棄ん間もきりのを各軍れ用意
 せよ分國は申觸上何とも仰へる紀ぞと知せよ御辺の郎從も呼
 ばせしよ和田も上洛あき某の郎後も一千余騎めて五日のうちに
 皆上京もまぐと下知を傳へらむければ恩地何とも分別る新田
 殿の申談せん更ありは御出らるるを宣ひたむとて何条更の侍らる
 きされども兼て最強がぬ人の如きはなまば子細あるべしとて即河
 内へ下知あてたり後楠新田と一所に在ると此事を語り出ると
 其時の御辺の正成を誅しぬんと仕りて条疑ひなきと被申らるる
 義貞何ぞ左やうの更有べきやと言まてて攝州湊川合戦の時面目
 なく侍まじと申あり其時の如此悪心を起しりつるよ侍此

天罰を軍心ありて有の海に申されしとて若今日捕新田の宿所より去る事あり危き事なるべし

靖義貞奉奏狀征尊氏

諸卿議新田足利確執

其後風評様々有て免み角に敵慮の赴を見よ邪の宣旨下りんと壁を厚を付て禁中の沙汰御前の評定誰誦の事子ども聞へる知も尊氏の奏狀如斯ちり也船橋中將為定二條中將為明の方より申来り依之義貞奏狀を被奉則ち草案を書て老中披露し則ち自筆に書しる誠子文才ありと自門も他門も感下ける其詞云

從四位上行左兵衛督兼播磨守源朝臣義貞誠惶誠恐謹言

請早誅伐逆臣尊氏直義等徇天下狀

右謹案當今聖主經緯天地德光古今化蓋三五所以神武

搖鋒端聖文定宇宙也爰有源家末流之昆弟尊氏直義不耻散木之陋質並蹈青雲之高官聽其所功堪拍掌一嘆太平初山川震動略地拉敵南有正成西有圓心加之四夷蜂起六軍虎窺此時尊氏隨東夷命盡族上洛潜看官軍乘勝有意免死然猶不決心於一偏相窺運於兩端之處名越尾張守高家於戰場墜命之後始與義卒軍丹州天誅革命之日忽乘鷓蚌之弊快為狼狽之行若夫非義旌約京高家致死者尊氏獨把鉄鉞當強敵乎退而憶之渠儂忠非彼須羞愧亡卒之遺骸今以功微爵多頻猜義貞忠義刺暢諛口之舌巧吐浸潤之譖其愆無不一入邪路義貞賜朝敵追罰論旨初起于上野者五月八日也尊氏付官軍殿攻六波羅同月

七日也。都鄙相去八百餘里。豈一日中得傳言哉。而義貞京
 洛。听敵軍破拳旌之由。載于上奏。謀言亂真。豈禁乎。其罪一
 尊氏長男義詮。才卒百餘騎。勢還入鎌倉者。六月三日也。義
 貞隨百萬騎士。立亡凶黨者。五月廿二日也。而義詮為三歲
 幼稚之大將。致合戰之由。掠上聞之条。雲泥万里之差。違何
 足言其罪二。仲時時益等。敗北之後。尊氏未被勅許。自專京
 都之法禁。誅親王之卒伍。非司行法之名。太以不淺其罪三。
 兵革後蠻夷。未心服本枝。猶不堅根之間。奉下竹苑於東國。
 已令苦柳。管于塞外之處。尊氏誇超涯皇澤。欲與立僭上無
 禮之過。無處遁其罪四。前亡餘黨。總存揚蟪蛄忿之時。尊氏
 申賜東八ヶ國管領。不叙用以往勅裁。養冠堅恩澤。害民事

利欲違勅。悖政之逆行。無甚於焉。其罪五。天運循環。雖無不
 往還。成敗歸一。統太化傳。方葉偏出于兵部卿親王智謀。而
 尊氏構種々。諛遂奉陷流刑。訖諛臣亂國暴逆。誰不思之。其
 罪六。親王贖刑事。為押修。正而已。古武丁放桐宮。豈非此
 謂乎。而尊氏奸假宿意於公議外。奉苦尊體於囹圄中。人面
 獸心之積惡。豈可忍也。孰不可忍乎。其罪七。直義朝臣劫相
 摸次郎時行軍旅。不戰而退。鎌倉之時。竊遣使者奉誅兵部
 卿親王。其意偏在將頌國家之端。此事隱雖未達。叔聞世之
 所知。遍界何藏。大逆無道之甚。千古未聞。此類其罪八。斯八
 逆者。乾坤且所不容。其身也。若刑措不用者。四維方絕。八柱
 再頽。可無益噬臍。抑義貞一舉大軍百戰。破堅万卒。不顧死



正成坊門
相國
足利
追討
の手と
の
圖

而退逆徒於于戈下得靜謐於尺寸中而尊氏附驥尾超險
 雲控彈丸殺籠鳥大功所建孰與論言所最矣尊氏漸為奪
 天威憂義士在朝請誅義貞而義貞願忠心盡正義為朝家
 輕命先勾萌奏罰尊氏國家用捨執與理世安民之政矣望
 請乾臨明照中正加漸割於昆吾劍可令誅罰尊氏直義以
 下逆黨等之由下賜宣旨忽拂浮雲擁弊將耀白日之餘光
 義貞誠惶誠恐謹言

建武二年十月日

とぞ書きたる則諸卿参列して此度如何有べきと會議有るれども
 諸御の中は義貞は親しく少く尊氏小親しく多し洞院相國公
 賢暫く思索して宣ひたる就中義貞の奏状の中は尊氏隱謀の事を

顯を天下の大事にあはば尊氏今何の故に朝家を奉恨やん是
 めりと実しくは但し諸國の兵を集り事を近日諸國は新田足利の
 両家確執を結んでみづりがらき度多しと云若其故も存せ
 片言を以て正せしむん更仁政は非ぞ又尊氏隱謀の事義貞阿
 黨の中より申出た由奏状に載せ新田が上奏は尊氏の隱謀を
 きしうみ書載たり先義貞は隱謀の実否を尋て後此度を尊氏に
 可被仰聞やと宣ひたるは時の相國たり人の宣ふ上の免れ角として
 大臣の録を重んじて口を閉小臣の圖を憚て言を出さるれ如く坊
 門宰相清忠進と出て申さるるは今両方の表奏を披て情一致の
 道理を案ぶるに義貞が差へ申如の尊氏が八逆一其罪輕か
 以就中兵部卿親王を奉禁殺由初と上聞は達は此一事申處
 實なる尊氏直義等罪責難遁但し以片言訟を獄る度卒事

子依く制をとも不可止まがく東説の實否を待尊氏が罪科を
定めらるべきりと被申はまは相國も八逆罪の内七の罪ありて過はあ
らざと宣ひなきども大塔の宮を弑し奉る条大罪なりと謂はる
何と宣ふなき様もあらは口を閉てぞ御在りけり良在て武
家の中へも御尋あまじしと宣ひなきは此儀然るべしとて千種忠頭名
和長年御番は侍るを被召く御證は有りぬ長年雲の上は御事
允下の知る所はわは流とて是非を申さば忠頭御の隠謀分明に承
ふ子細あり但し新田が隠謀の志有より下愚の者ども申は又尊氏
が隠謀あるとも申は伺きも分明は不承は世の風聞のまたり其中は
大塔の宮を弑し奉る由申は又尊氏は東八ヶ國の管領を給てはみ
よつと今度時行滅亡の時軍忠あり者共に賞を与へよ元弘
の軍の恩賞は給し新田の一族どもの町領を沒收せんと欲する由と

聞て義貞が所々の所領どもへ兵を入置戦ひ由申は又義貞が分國
の内足利一族どもの所領を義貞沒收仕る由も申侍る是も實も
不知戦ひの必定と聞は只兩家の者どもを尤右よよせて私
戦ひを致さんとあそ見へくと世の取沙汰有のまにぞ被申より
けき君もはくぐと聞召て如何も重て評儀を加へくと宣ひなき
は其日の評定を事たりて終りたり

候禁闕正成述忠言

正成關東進發望搦手

斯る所は塔宮の御始効は進らせ給ひ。南の御方と申女房
鎌倉より歸り来りて事の有様有のほに奏して申させぬひけ
まは叔も尊氏直義が叛逆無子細とて敵慮更は不穩是を了後不
思義の更と思召所は又四國西國より足利殿の成る軍勢催促の
教書とて數十通を進覽を就之諸御重て食後有て此上の非

所急は討手を可被下として一ノ官中務卿親王を東國の管領もなせ
 奉り新田左兵衛督義貞を大將軍と定て國々の大名共を可被添と
 仰せ出されり爰は土御門大納言被申り尊氏罪科已定
 上の愚意を述るに不及と申あがり片言にて侍は六今一應慧演
 上人を鎌倉へ下し奉らせぬひて尊氏が申条をも聞召は過の輕
 重をも御定あまじしと存じと被申りまじども主上更は聞召は入らま
 ざれば洞院相國正成の聞ある智謀無双の者あり彼は御尋も有て
 申様も聞たすひかんやと被申上りて君實もと思召まけんさ
 らばとて正成を被召り君此度を直は御尋ありたり正成洞院の
 相國は對して勅答申り實は由々き御大事にては新田へ京
 都より足利の東國は居りて兄弟の内一人罷上せし侍まじと尊
 氏を召上せて両方の奏を聞召りて別の度はわづら只彼兩家

不謂確執は依て互に朝敵するがら度を朝敵は寄て亡さんと
 ろが為と覚へて自今已後水魚の思ひを成ぶと被仰下ふた
 少の勅命は背侍らんや今卒爾は兩家の内何をせりとい誅罰
 の宣告を被下あむ諸國の朝敵とあらん者ども新田足利に限
 る多かりし去バ勅定を以て東は國の内をも已前の給りて所
 領を新田の一族を本給人ありて新田の分國の足利の一族の所領
 をも本の給人を附して先天下の乱まざる様は御謀ひあると被
 申けるかゝる所は坊門の清忠被申りて兩家とも朝敵とあら
 とも何ぞ天下の士朝恩を捨て義貞尊氏は寧せんや過の重き
 を以て刑罰を輕きと然る非あり既に大塔宮を殺し奉る罪科輕
 きより急ぎ誅罰を加へたまはざんば王位の輕きふ似たり只節
 度使を被下て尊氏兄弟を誅罰しより外は不可有と被申

たりり君實も思召らんさぶ新田を可下り定りけし諸
 卿眉をひそめて退出しゆらり又喜をかりて被還りありたり。
 正成の相國は向て忍びやう被申々坊門殿の仰義己は然たり
 ととぞも時と相應せむ今朝家の御政古き例を被思ひ故少しし
 無私との共右府頼朝御より己來武家天下の權を執て後身
 又餘臣夏年久きを今此御代は當て御政元は歸して侍まば諸
 國の武士數年の修り習て朝家を奉恨者幾千萬人御覽以
 北國西國の朝敵一時に起りて攻上りまへん義貞正成は親
 き者どもと皆義貞に敵し正成は向て弓を引かん奈無疑天下
 又武家の有とを侍んと存む誠以て歎し紀事抄とて泪を
 流しちかぐ暫有て被申々る但し弓矢の事向後義貞と某等が
 討ひは御任せあらんを拙き肩はあははゆべきを公家の人々御口入

有んむれば心なるは肩を可仕りてはあは口惜や元弘の古某天下
 の士は先て朝夕肺肝を碎き終日終夜は不怠して冬の寒霜を頭
 頂き夏は炎暑は犯まん事を痛みて相州の一家を亡し君を御
 位に即奉りし無幾程して足利が為り天下を被奪らん無念
 きよ身の討死は於る露も惜し侍を相國願ふ今一度為
 君為國を思召る君の逆鱗を申なごめ奉せりひて關東(勅使を
 下)足利をとりし此亂の萌を去めぬる來年の春乃頃ハたどら
 上洛せざらん今ハ此仰の聞んむる無尤右の上事不可有は其
 間ハ尊氏ハ隱謀の實否を聞召定めさせぬる可有と申て乃り
 楠平生の何事の有ても少くもる人なるが氣色打たせ
 と泣く被申々る相國は何奈夫を遣の吏ハ可有とも思召さ
 けしともあつし忠臣うなと思ゆれば不覺御泪を流しけり

けはされども重く再奏しつゝのりけり果して捕が申せし
不違大乱と成し後相國山門より正成が云し事を主上へ御物
語有らるる君も臣も遠慮ある男もこそと宣ひたるこれハ扱置
後日弥朝敵追討の宣告下し由を聞て大に驚き追手比大将ハ
定めし義貞朝臣たるべし搦手の大将ハ誰と問はる大智院宮
彈正尹宮武士より新田の一族江田大館なりと申正成歎息して
速に御所へまのり相國ハ對顔し奉りて申らる既に尊氏追討の
宣告下り由大手ハ義貞も御座りハ氣遣ふ事有べし此軍天
下分目の軍もて勝敗の一挙よかそい若打負候々天下忽ち尊氏
の有と成べきもていあをま臣願御許容下され度段被申入る
ハ相國則此赴を奏せしむるは主上御答被遊る何条尊氏も不

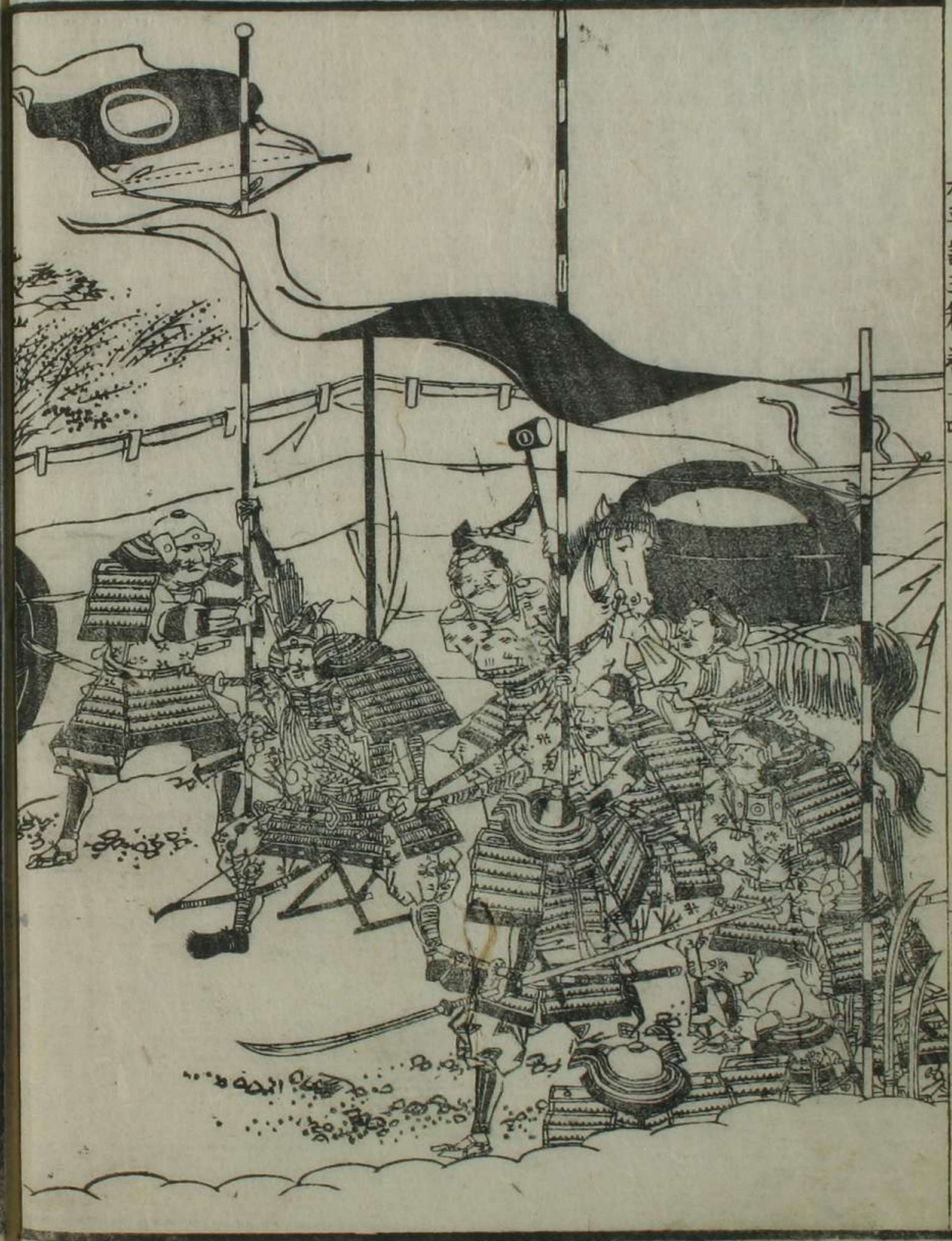
程の事うろろん義貞即時は平定まを。かゝる時節京都の守護
第一たるべし正成止て驚固仕まをりく正成額汗を流して
種く利害得失を再奏し奉るといども准后と坊門清忠卿さ
まろと妨げ申さる、みより更し御許容をうりらる正成泪をな
じく禁門を立出天を仰ぐ大に歎き嗚呼已ゆらる天下と申と
まろく宿所より歸らまけた
賜宣告義貞進護鎌倉
諸國武士競服尊氏
かゝるまを十一月十九日新田左兵衛督義貞朝敵追討の宣
旨を下し給ひ兵を召具し参内せらる馬物の具誠は爽み勢ハ
有て被出立とらる内弁外弁八座八省階下陣を張り中議の
節會被行て節度を被下治兼四年は權亮三位中將惟盛を頼
朝追討の爲は被下時鈴をり給たりしハ不吉の例るればとと。

今度へ天慶正平の例をぞ被追り義貞節度と給て二條河原へ
 打出て先尊氏の宿所二條高倉へ船田入道を差向て時の聲を
 三度奉させ流鏑三矢射させて中門の柱を切落を是の嘉承三
 年讚岐守正盛が義親追討の爲に雲の國へ下りし時の例ちりとぞ
 聞し其後二宮中務卿親王五百余騎を三條河原へ打出させぬ
 ころに内裏より被下し錦の御旗を指上りて俄に風烈しく吹く
 金銀を打て着る日月の御紋を地へ落りたるこそ不思議
 議を是を見ざる者あを浅はしや今度の御合戦をけりて志かたじ
 と思思とぬ者へたりたり去程は日此午の刻に大將新田元兵
 衛督義貞都を立ぬ元弘の初に此人さしもの大敵を亡くして忠
 功人よ越りしころも尊氏卿君よ咫尺のふり依て忠賞さすも
 ても無きか陰徳遂に露まきと今天下の武將は供りのひらきと

當家も他家も押並て偏執の心を失ひて付不随と云者ありまら
 當家の一族より舎弟服屋右衛門佐義助式部大夫義治堀口美
 濃守満貞綿打刑部少輔里見伊賀守同大膳亮桃井遠江守鳥
 山修理亮細屋右馬助大江田式部大輔大嶋讚岐守岩松氏部
 大夫籠守沢入道額田掃部助金谷治部少輔世良田兵庫助羽
 川備中守一井兵部大夫堤宮内卿律師田井藏人大夫是等を
 宗徒の一族とて末の源氏三十四人其勢都合七千余騎大將
 の前後に打圍たり他家の大名より千葉助貞胤守都官治部大
 夫公綱菊池肥後守武重大友左近將監厚東駿河守大内新助
 佐々木塩治判官同加治源太右工門熱田摂津大官司愛曾伊
 勢三郎遠山加藤五郎武田甲斐守小笠原信濃守高山遠江守
 川越三河守児玉庄左工門杉原下総守高田薩广守藤田三郎

左衛門難波備前守田中三郎右衛門船田入道同長門守由良
 三郎左衛門同美作守長濱六郎左衛門波多野三郎高梨名張
 小國池風間山徒まの道場坊是等と宗徒の兵とて諸國の大
 名三百二十人余其勢都合六万七千余騎前陣己尾張の熱
 田ま着々まの後陣へいよと相坂の園四官河原ま支へり東山道の
 勢へ搦手まま六大将よ三日引下て都を立け其大将ま先大智院
 の宮彈正院の宮洞院左衛門督実世持明院兵衛督入道道應園
 中将基隆二条中将為冬侍大将ま江田修理亮行義大館九京
 大夫氏明嶋津上総入道同筑後前司饗庭石谷猴子落合仁科
 伊木津志中村頼頼真壁十郎美濃権父是等を宗徒の大将とし
 と其勢都合五千余騎黒田の宿より東山道を経て信濃の國へ
 けま當國北國司堀川中納言二千余騎ま馳加り其勢を合て

一万余騎大井の城を攻落して同時に蘆倉へ寄んと大手の相園を
 ぞ待りける討手の大軍己よ京都を立ぬ由細川阿波守馳下
 て此事注進しけま右馬頭直義仁木細川高上杉の人々將軍
 の御前ま忝とて己よ御一家を願申されん為よ義貞を大将ま
 東海東山の兩道より攻下いなる敵ま難所を越さんま防戦と
 甲斐有ま矢矯薩埵山の辺ま馳向て御支いじと被申けまど
 も尊氏暫黙然とて宣ひたる今國々の私軍ま味方毎度利を
 失ふ今朝敵と成て京都より大勢攻下りま一家の滅亡此時
 よ有と眉を皺め申されま師直此事を直義ま終む直義座
 とより穿て私語被申々々兄尊氏ハ危宣ま今集る軍勢
 くべ直義一人を本人とて出ま参せま家の為よ捨ん命露を
 を惜うと所謂大塔宮を弑し奉る条是一ッ諸國へ軍勢催促



御教書を下したる条是二ツ此兩条の御咎なり御教書の事ハ直
 義存知して師直は終る所大塔宮を弑し奉る本より直義
 が討ひよして兄尊氏御存知なき度之然ハ御方の兵の走者ハ御
 運を一時ハ可被用如今新田ハ勢付バ尊氏の御支ハ御法体ハ御
 兵を被替東山北陸の道を經ひて京へ上り無罪由准后を以て
 宣わらるる勅免あらんと被申けまバ尊氏聞ひて旁を捨
 申さんまわらば先斯くて諸國の躰を見んとて家子郎從の来
 と兎角謂けまはる我禰代弓箭の家ハ生且儘ハ源氏の名を殘
 せとといども兼久以來相摸守顧命ハ随と汚家差名恨以積
 るしと今度繼絶職達征夷將軍望與廢位極役上三位是臣ハ
 微功ハ依といども豈君恩ハ非也恩を裁き恩を忘る度ハ為
 久者所不為也抑今君有逆鱗所ハ兵部御親王を弑し奉る諸

國ハ軍勢催促の御教書を下しと云兩条の御咎なり是一ツも尊
 氏ハ所為ハあらば此条ハ謹で事の子細を陳ト申さば虚名遂ハ消
 て逆鱗なき静らまらざらん旁ハ兎ハ角ハ身の進退を討ひぬ
 尊氏ハ於て君ハ向ひ奉て引弓放矢有べからばさて猶罪科道
 る所なくハ剃髮深衣の姿と成と君の御為ハ不忠を不存所を子孫
 の為ハ殘すなると氣色を損して宣ハ果ハ後の障子を引立と内へ
 ぞ入給らるかたもハ甲冑を帶して恭集しとる人ハ皆兵を醒
 て退出し思の外なる事外と私語ぬ者ぞ無りたるされも尊氏
 朝敵と成と義貞節度を賜て下りて云々尊氏方の人ハ
 喜で只今まで義貞の方人として戦ひ人々もあは浅間ハ
 武家の頭とも成ぬひるハ為家為身もと思ふこと義貞の為
 一命を輕じりさて其人を指てもたれ公家どその下部ハこそハ

成ゆひふりり向後とて頼まれぬ人を憑きて何うとせんと昨日今日追
 新田の方まで一二と被謂し川越小山沼田北人々縁を求て將軍此
 御方へ馳服り程は益て運と兩方へ任せ人々も皆將軍の御方え
 びるる然るに河村の庄も御方なりし者ども皆敵に成るる代官
 所領を去て上野へ趣し其外新田東國の所々の知行數々所有し
 皆如斯一日二日の内に御方皆敵に成て物の色の変むる様も成る
 り新田四郎も一萬余騎もて武州川越へ出向て義貞下りて力と
 合せんとて待居りりるる義貞へ節度を賜て公家方に成り尊氏と
 朝敵と成る由を聞と思ひの外さるる更らるるははぶかて五十騎三十
 騎打連々將軍の御方へ来りりるるもどに義重が一族三千余の外
 たり此小勢もて始終如何の有べきとて新田へ引くく角て一兩
 日をもどぎるる所は討手の大將一の官を始新田の人々参河遠江まで進

とめと騒々るる細川阿波守高右衛門等直義の方へ奉て申りる一家の
 御運へ被用めと覺へ昨日まで新田は属々る者共も今日御方へ
 走服て御勢の雲霞の如し然れ共人の心へ知らまを侍れ將軍と
 鎌倉へ留置奉せと直義は新田へ行會人所す御向ひ有と合
 戦在る侍を將軍へ猶前の如く義の當る所を宣ひ鎌倉は在る
 最善うりさんと申せ此義可然とて夜深く後直義將軍へ参り此
 由を申させぬへ免る角めと宣ひ依て次の日細川阿波守高
 右衛門佐々木道誓赤松筑前守は談じて直義の宿所へ行諸
 將列坐の前まで何知らぬ自ら云る將軍の仰り事なれど
 も如今公家一統の御代とならん天下の武士も指さる吉文な
 き京家の人々も順て只奴僕徒者の如くなるべし是諸國の地頭御
 家人の心は憤望を失ふとて今日まで武家の棟梁とあり

太平記三篇卷十四上

ぬき人たるに依て心なきは公家相従ふものなりされば此時御一家中に思召立御度ありと聞たりんは誰り馳参らてはき是を當家の御運の可開初まては將軍も一往と理の推所を以て加様仰はくも實は御身の上は禍来らば左で御座は免や角長僉議して敵は難所を越らば後悔も益あるは將軍の倉は残りぬめ奉々を左馬頭殿御向ひ我等面々御供仕と運を一時は開きゆんんと被申は左馬頭直義斜るは喜で聽て漁倉を打立と夜を日と継ぶ急ぎたり相従ふ人々も吉良左兵衛尉同三河守子息三河三郎石堂入道其子中務大輔同右馬頭桃井修理亮上杉伊豆守同民部大輔細川陸奥守頭氏同刑部大輔頼春同式部大輔繁氏畠山左京大夫國清同官内少輔足利尾張右馬頭高経舎弟式部大輔時家仁木太郎頼章舎弟二郎義

長今川修理亮岩松禪師頼有高武藏守師直同越後守師泰同豊前守南部遠江守同備前守同駿河守大高伊豫守外様の大名ゆへ小山判官佐々木佐渡判官入道道譽舎弟五郎左衛門尉三浦因幡守土岐弾正少弼頼遠舎弟道鎌宇都宮遠江守佐竹允馬頭義敦舎弟常陸守義春小田中務大輔武田甲斐守川越参河守持野新次高坂七郎松田河村土肥土屋坂東の八平氏武藏の七黨を始とて其勢九万七千余騎十一月九日鎌倉を打立同廿四日冬河矢矯の東の宿は着より新田義貞へ尾州黒田は陣を取御在せしは直義数万騎めて参州矢矯は着ぬと云り義貞へ東國の者共が心替と尊氏兄弟は屬ゆると夢も知ざりたり穴不思義や今何は依と直義矢矯より上るを世の虚説とぞ在らん然も指置へ

ハ非むと軍勢を六熱田まで進ませ我身の尾張の府に在るに上野より註進の早馬來りて六熱田の東國の者共皆心づもり仕て尊氏兄弟も着て多りと思ひ知らざるも何程の更ら有べきと事も無氣に宣ける然ども船田を始として宗徒の人々の案は相違してぞ見へる義助の云長は如何に東國の者どもは偏は物の着てぞ狂らんと覺ゆるぞ今や尊氏も隨つらとも朝敵の成たるを當家へて可參り御方は親しかりし者共の足利は随事こそ心得ぬと宣はるどもお止むまは非ざれば去は行向て戦へし軍を進めりしける

隔矢矧川義貞與直義戰

公綱大進破足利勢

去程は十一月二十五日の夕の刻は新田左兵衛督義貞殿屋右衛門佐義助六萬餘騎にて矢矧川は推奇敵の陣を見渡せば其

勢二三十萬騎も在ると覺敷く川より東橋の上下三十餘町は打圍で雲霞の如く充滿たり義貞先陣を川の端八町此方軍を張り長濱六郎九衛門船田入道二人を呼ぶ此川何方を渡せばき處ある委しく見と泰きと宣はる二人川の上下を打廻り聽て馳歸り申らる此川の様を見れば渡るべき處は三ヶ所はとも向の岸高しと屏風を立ちたる如くする敵を揃へ支へ此方より渡る中敵は利を被得んと存は只且く河原面は御磬りと敵を欺る定て河を渡して懸り候も其時相懸り懸り河中へ追落し手痛く當り程わらへるどり勝事を二戦し得てははと申はる諸卒皆此義に同じて熊と敵は河を渡させんと河原面は馬の馳場を残し中の瀬は左の一陣大江田細屋錦織田中上山一手は成て三千餘騎右の二陣は大嶋額田籠澤岩松一手は成て四千餘

騎をり兩陣の中より引退く鳥山大嶋一手に成て三千餘騎
 三町退く九の長濱六郎九衛門二千三百餘騎右へ由良新九衛
 門千八百餘騎中の陣は義貞七千餘騎只一軍に備を堅くして
 陣を張り後の九の船田長門守三千餘騎後の右の世良田兵庫大
 二千餘騎あり夫より後の菊池大友塩冶朝山千葉宇都宮大
 内加地加藤武田小笠原南部鳥山等諸國の軍勢一勢に引分
 る陣を堅く先陣後陣都合四方五千餘騎あり上の瀬への堀口
 挑井山名里見五千餘騎後陣を藤田兒玉杉原小國三千餘
 騎一軍と成り先陣とて川を去る事五町前後の陣の間二町く
 後の堅く陣を張り前の横に陣を張り下の瀬の中の瀬へ近く
 十三町引退きて先陣は熱田攝津守池風間四千三百餘騎一
 勢に引分る軍を備ふ次は服屋義助六千餘騎軍を二つて備へ

より先陣を去る事一町夫より後の陣は諸見六郎戸坂新七三千
 三百餘騎左右に陣を去り敵を呼引出せとて名張畑巨理栗
 生四人を足輕大将とて強弓の精兵を勝て三百餘人河中の
 洲に往て手くよ持楯を突く敵に向ひ雨の降如くよ射込る
 空矢ハ一ツも無りたる佐々木佐渡判官が手の者共痛手餘を
 失度路に成り岸より下は隠れ伏せ畑巨理是を見てさるもの
 岸を楯として隠れて久敷謀は非を幾程も命の延たんと
 て笑ひはる吉良左兵衛土岐頼遠加様の時兵を渡され御方不
 慮の負をさる者ぞ早く渡せとて上の瀬を渡す藤田兒玉杉原
 小國が三千餘騎暫いたる敵川端より三町余を過んと思ひ
 時懸ると下知り共耳も聞入る軍を亂して懸てさるが河

を渡を敵の先陣は追立ちまゝ堀口桃井山名里見の人々五
 千餘騎太鼓を撃つべくも備を乱さず静に懸合と戦ひ程は
 吉良土岐が兵へ先は四町餘を懸り来て兵疲し軍の備乱るる
 まゝ立ちまゝ河へ追入れられ三百余人討せり義貞の本陣よ
 り由良長濱船田三人来て御方を制して川を渡させ高右衛
 門師直舎弟七郎師泰中の瀬の先陣の者共が渡されぬを上
 の瀬の味方を討せり仁木細川今川の人々の不覺は非ざる
 とて橋より下の瀬もけりぬ深き所を一萬三千餘騎にて打
 て渡せし大嶋額田龍澤岩松の人々何れも備を不亂高川を渡
 て八町計来てまゝと思ふ程は太鼓を鳴り相懸りかゝりて戦へ
 ば此手の敵も小鳥の鷹も追々如く川へ追入れられ高兄弟も己
 は討せぬと見へる處は重恩の郎後返り合と討死仕る間北

延ね籠澤大嶋續く川を渡さんと謂ふを義貞止まらぬ細川今
 川石堂荒川の人々も爰を渡させぬ所を連一萬余騎にて
 中の瀬を渡して官軍惣大将義貞が陣へ切入るるを鳥山大嶋大江
 田錦織彼是都合五千余騎義貞の下知を守り討つ懸り又後
 由良長濱を先とて大将義貞軍を乱さず静に進るとは細
 川等の兵も同く追立ちまゝ河へ落入討る者數を知らず義貞
 兵を進めて川を渡されんと思ふ所は猶不渡して返り鼓を打て
 備を堅め御在りぬ後立諸國の兵一萬五千余騎一勢
 一勢軍を備へて来りぬ義助七千余騎を義貞の前を推
 らせ静に川を打渡せば敵一支へもせぬ退り義貞も渡さ
 ざらぬと軍使を遣されぬもども義貞亦使を遣して義助川より
 此方へ兵を入ぐと下知せられぬも力も及ばず義助數千の

敵と討捕く川の此方まで被引り。義貞義助は宣々々々尊氏何方
 は在共知らば何と長く川を渡り敵を追はん。尊氏五里六里
 の内も在て来らば大勢も在かん。御方長追して疲ま
 敗軍の端たぐへと宣しを。義助の云御説の旨兼るひぬ。今日の
 御合戦の次第一と圍ふ當り侍る。但し川を越り追給はざるを武
 畧の不足所候若尊氏數萬騎を後候とも。先手の大勢ひ
 さ立らば踰留く軍を仕るべき者よと。又宗徒の軍を仕いと
 んむ者共へ高兄弟。仁木。細川。侍共此等へ皆川を渡りて戦
 候へば尊氏の傍人存侍らば三日路追らば皆討らる。義
 敵を生く御返し在らん。御不覚ぬこそと申さる。乃々々々義
 貞も諸兵疲まき長追せん。荒手来りたるんよ。不慮の負
 とま物なるぞ。後見給へ義貞が渡らる能まら侍りかん

と宣しと。日も己暮るる合戦へ明日までぞ有んと鎌倉
 勢も皆川より東陣を取居る。如何思ひらん。爰まで不
 叶と其夜矢矯を引退き。鷺坂陣を取らる。から所は宇
 都宮。仁科愛曾。熱田の人。後池あて三千餘騎。二十五日の酉刻
 は義貞の陣は着たり。今日の戦は合さる事を無念にあひ
 翌朝公綱義貞は對面して謂らる。昨日の軍は終は敵の頼を見
 ぬ。今日の先陣は公綱は給侍と請らる。由良新左衛門當
 家の一族の中は先陣はさき人多く侍る者をも申らる。公綱
 氣色変く見ゆる。上義貞由良は對して怒り宣らる。汝物の意
 と弁つて當手の者共昨日手痛く戦ひ。今日又公綱先陣を望
 給ふ事其謂はあり。當家の氏族の官軍は。諸將皆朝敵
 は非也。以て輕き思ひを成んや。仰最は先陣を參せん。おどろぞ。

但御邊の兵千騎も過間敷い誰さる御一所も参らせ候もん當
 家の者共何まなりとも仰よ依り御下へ参らせん召呉せられ侍
 且と在り多公綱仰承りぬ先以今日の先陣給り候事身の面
 目も候仁科愛曾熱田の者共も望所も侍る某彼是一手もわらう
 ば三千餘も侍らん何れも手の郎従も侍る足利が取集勢
 二萬餘騎も對しらん敵の先陣二萬もより過ひらたなり
 先陣一軍を討崩して御見泰も入侍らめと荒く敷答へるよ
 義貞由良が謂様も腹を立たりと思われぬも仰迫もたう九
 ぞ候ひらん御辺の御事の東國無双の弓取なり依之こそ元
 弘の古も君より召出さるもさせ給ひたりぬも故相州が代も
 も西國もては楠東國もては御辺と呼び日本一州も別も人ちも
 様よこそ侍りはる今日御合戦一大事も候能被遊候へ万夏へ

頼入候其上義貞が私の事も非ど君の御大事もて侍ると宣ひ
 々も公怒氣色揚げ打交り出りぬ新田が勢如昨日川の表へ打
 出陣を張る宇都宮熱田等先陣を望て一陣も仁科熱田千六百
 餘騎一手も成り進む二陣も宇都宮愛曾千六百餘騎是も一手も成り
 進みたり前後二陣も分ち中の瀬より一文字も川を渡して見るも敵
 公綱大將の陣も人を遣して敵も敗して候川を渡させ給へと申
 乃も義貞敷敷萬の大軍川を渡してたり義貞今日軍勢を休て明日
 こそ敵の在處を聞くと向めと宣たりを公綱敵へ定て曉天も及でこそ
 敗し候もんと存る明日軍を進らば侍る敵要害も陣を取てぞ支へ
 候も由敷御大事もて侍る北の敵も追懸ん道も追著ん必定
 めて候然らば敵へ引大勢を立直さんと前後乱ん所を撃ん御方勝
 ぶと云夏つるべ唯某の申言もよらせて兵を進られ候と申こ



宇都宮うつのみや
公紹こうじょう
鷲坂うさきざか
直義なほよしか
破陣やぶじん
昏くら

平らに義貞最能く被謂て候へ打立者共とて貝と吹太鼓を打
 て進まざる。先陣ハ宇都宮義貞の軍勢ハ二里先達てぞ進る其
 日の晩ハ宇都宮十六里を進ん天龍川の西北端ハ陣を取る
 義貞ハ同國の濱名も御在し公綱敵警坂ハ在を聞。義
 貞の陣ハ人を遣して母のらく人馬ハ食事させ天龍川を渡り寅
 の上刻ハ警坂へ押寄矢一をも射先陣と指おき後ハ田直義
 貞陣ハ切懸りたも。十一月寒夜たれども官軍ハ酒食腹ハ満く寒
 さをも恐も鎌倉勢ハ未ど食事ハせど諸兵疲もゆる上今敵
 寄ぞしとも思ひゆるる故ハ前後不覚ハ乱る高右衛門が
 陣ハ熱田切入も是も将士とも皆疲もる故前後も知らに
 寐入も師直小具足計も出合もれども何を敵何を味方とも
 不知も。馬ハ打乗く東を指てぞ落る。細川ハ陣ハ仁科

向ハ仁科ハ陣ハ愛曾が向ハ。皆打勝も。公綱先直義ハ陣
 又火を懸る。諸陣取物も取あむ。我先もと。北行も。菊池肥
 後守。松浦田平左衛門諸軍ハ先立馳来も。軍ハ敗りたり。竟
 御方勝軍も。今行て同士討も。詮も。迎十餘町
 北方の田の中ハ旗打立て夜を明も。軍散も。寅の下刻も。成
 夜ハ。明も。義貞が先陣諸國の官軍ハ泰り。

後小義貞此巻を自記せし。我一族の事ハ細く。吉文も。

委し。記し。此場の合戦も。更も。依之。公綱熱田仁科

等義貞を恨て後ハ。又尊氏の方ハ。付り。

義貞渡手越川破直義
 上杉重能偽論旨激將軍

直義ハ警坂手越を宇都宮ハ破。大軍散も。乱も。落行も。同
 直義も。僅百騎も。鎌倉へ。志く。落ら。処ハ本間村上川越戸

嶋の人々矢矧の軍は御方打負ふると聞くと二万余騎まで上りたる伊豆
 の府まで行合ふりさるる取て返て戦へと大将直義又取て久きれは是
 よ又色を直と手越川を前と當てぞ陣く高右衛門申らるる前と御
 方川を越て戦ひしは依てこそ不覚の負を仕てたり今度の御方川を前
 と當て防けとて先陣は今川吉良石堂都合其勢一万余騎中の陣へ本
 間村上川越戸嶋荒手の兵二万余騎三番の高家の一族十六人其勢一
 万五千余騎四番は細川陸奥守八千余騎備を五手に分ち三手と先
 とし二手を翼とせり又仁木上杉各一万余騎其次は大将直義一万余
 騎後陣は赤松貞範武藏の横山の者ども三千余騎を陣を張り又一方
 は佐々木道譽土岐頼遠兩勢一ツは成る二千六百余騎何れも陣の張
 様四度路ふりて新田の陣を似るべくもたし義貞下知して新田の
 加つらなむとて何れも支る有べきとて押寄と相戦ふ先陣宇都

宮へ八百余騎二陣の千葉軍を二手に分ち四千餘騎其次は服屋
 右衛門佐義助六千余騎其次は大将義貞諸國の兵を前後よりして
 軍を張る事矢矧の如く直義の味方矢矧を渡して負たるを手取りし
 て不渡手越川の只一瀬よて向の岸屏風を立てるが如くなるを千葉
 宇都宮あまを渡して戦ひたるは鎌倉勢道中よきとみ横二
 町をあけ左右より弓矢を立く官軍戦乱して追来るを二町のうち
 を通し兩方より雨の如く射りける寄手これに射立らむとてた
 りし所を荒手比兵打てかきけむは泳む川を引返して退きけむむ
 鎌倉勢川を渡して追くる公綱川の中よて取返し忽ち敵八騎
 を切て落さしこれに恐みて鎌倉勢も引返して大将義貞十六騎の猛將
 を馬の前後より置川端に至り一と其辺りを詠め何条川よ此瀬一ツ
 ならんや別よ渡さむき所の有らんと所の者を召て同被申らるる此

瀬の外は瀬へたしと申。義貞其人は河の体など細くと尋て夫より
 川上川下三里を打廻り申さるる。河へ少く深きも向の岸
 少く平らみして渡さば渡しよげなる河のありたるを見定めて夜よ
 入らば由良新左衛門を先陣の大將として射手を勝て三百人を
 指添二陣へ船田長門守二十餘騎向の岸の少く切立卒難き所を
 鉄で切崩し平らにして川を渡させらる。二千余騎の兵安くと渡り
 たり大將義貞の運兵三百騎をりりり川の此方よひを伏て窺御在
 りたり。由良敵の後陣土岐佐々木陣は夫を放つて陣をばくく敵
 是は駭かしてひるぎる。成り引らる。土岐頼遠佐々木道誉さな
 し返せと下知をばくも耳も更も聞入む。弓箭物の具を打捨乱れ
 騒ひぐ逃りり。由良新左衛門是は氣を得て六百余騎を引率し
 縦横よ切て廻る道誉は此時痛手を負てやむ事を得む。て降参し

頼遠は辛やて遙は落りり。直義の陣へは船田長門守是も近く忍
 びより矢を射込せて強ぐ所へ千余騎もて切入る。是も官軍八万餘
 騎何を渡も躰も見へり。直義の陣を始して諸陣悉くひて
 騒ぎ。是もさうさう立く乱れ何國とも落ちたり。是も新田義
 貞度々の軍は打勝て伊豆の府は着り。は落行勢ども巻紘脱兎
 降人よ出る者數をあらす。宇都宮遠江入道の元來惣領治部大輔
 公綱京方は在り。其緑よあきて弛着り。既よ佐々木佐渡入道の
 自太刀打して痛手数多負ふ。舎弟五郎左衛門の手越して討
 ら。是非なく降参して義貞の前陣は打つ。後よ宮根の合戦の
 時又將軍へ参りける。此時官軍若足もたぬ。追かたる。敵
 鎌倉もも怖ふ。今ハ招く。東國の者ども清方へ参る。は
 油断し。其上東山道より下し。搦手は勢をも可待とて。伊豆の

府は被逗留とまどるこそ天運てんうんと云いわぐ。残念ざんねん申まをせりもなき。左馬頭さまのうし直義ちかよ朝臣あその鎌倉かまくらに帰かへり合戦あせの様ようを申まをせん。為なし將軍しやうぐんの御屋形おんやがたに参まゐり。四門しもん空く閑かんと人ひともなき。體たいくわくか。門かどを敵かたて維まもり有あり。同どう申まをされ。須賀左衛門すかざゑもん出で合あて將軍しやうぐんの矢矧やせきの合戦あせの事ことを聞き召まを候こうひ。より。建長寺けんぢやうじへ御入おんいりりて御出おんで家けり。んと仰おほせらる。を面おもてく様よう申まを止とめて置おき。御元結おんもとむすの切きせ。ひて。い。と。も。い。ま。も。御法おんはふ體たいよ。さ。せ。ま。の。と。申まをる。左馬頭さまのうしを始はじめ。高上たかかみ杉すぎの人ひと。是こゝを聞きて。か。て。の。弥や緒じゆ軍ぐん憑たもを。夫つまあ。へ。し。如何いかへ。せん。と。氣きを痛いためて。夏なつの躰たいを見みる。ふ。惣そう軍ぐんの緒じゆ卒そつ爰こゝか。こ。よ。寄合よしかい落お支し度たを。さ。る。中なかも。て。も。私ひそ語ご々々。天下てんか公こう家けの針はりひ。と。り。ま。ぶ。武士ぶしの世よに。在ある。と。も。不ふ思し皆みな公家こうけの奴やつと。成なて。乞こ食じき内うち前まへ。と。う。べ。し。あ。ら。を。尊うん氏ぢ出でて。軍勢ぐんぜいを。下げ知し。一いつ戦せんを。快こころよく。仕しと。ま。へ。と。は。ぶ。や。者ものも。あ。り。今いま。追お新田しんでん。は。親おや。く。ま。く。今度こんど。當家とうけ。参まゐり。も。頼たのみ。と。思おも。へ。る。新田しんでん。殿との。の。朝敵あそたか。と。な。る。は。し。て。公家こうけ。と。一いつ。つ。よ。ま。り。ゆ。ひ。と。る。故ゆゑ。一いつ。度た。立た。退ひ。て。取と。り。し。又また。足利あしかが。殿との。軍ぐん。立た。拙せつ。く。渡わた。ら。せ。ゆ。へ。り。不ふ如たふ。世よ。を。適たふ。と。び。や。ち。ん。ど。申まを。も。あ。り。さ。は。は。く。心こころ。く。は。申まを。伏ふ。せ。さ。る。中なか。に。も。新田しんでん。は。と。せん。と。云い。者もの。更さら。に。さ。く。是こゝ。を。聞き。く。直義ちかよ。嬉うれ。し。紀き。夏なつ。は。思おも。ひ。さ。て。此こゝ。後軍ごぐん。は。打負うちま。たり。と。も。諸國しよこく。の。兵へい。朝家あそけ。は。隨ま。ふ。ま。じ。ま。心こころ。と。見み。へ。る。但たゞ。し。將軍しやうぐん。を。今いま。出で。し。参まゐ。ら。せん。夏なつ。の。朝恩あそおん。を。こ。も。れ。ゆ。ゆ。成な。る。な。ら。ば。後代ごだい。逆さか。の。嘲あざわ。を。た。ら。ん。と。宗徒しゆと。の。人ひと。く。寄合よしかい。評定へうてい。あり。る。と。上杉うさぎ。伊豆いづ。守まも。重しげ。能の。且かつ。く。思案しあん。して。將軍しやうぐん。縱た。ひ。御出おんで。家け。有あ。り。て。法はふ。躰たい。は。な。る。せ。ゆ。ひ。ひ。と。も。勅ちく。扞けん。適たふ。ら。ま。じ。ま。様よう。を。た。に。聞き。召まを。し。思おも。召まを。直ちか。さ。せ。ゆ。ふ。事こと。あ。ら。無な。く。て。い。へ。も。謀まを。は。論旨ろんし。を。二ふた。三さん。通書つうしよ。て。將軍しやうぐん。は。見み。せ。ゆ。ゆ。の。せ。ひ。ゆ。や。と。被お。申まを。け。ま。は。左馬頭さまのうし。免めん。も。角かく。し。事こと。の。よう。う。ん。様よう。は。計けい。ひ。ゆ。ゆ。と。被お。任まを。たり。る。伊豆いづ。守まも。さ。う。ぶ。と。て。宿紙しゆくし。を。俄はな。に。添出そでだ。し。能書のうしよ。を。撰せん。で。職事しやくじ。の。手て。子こ。少せう。

府は被逗留とまどるこそ天運てんうんと云いわぐ。残念ざんねん申まをせりもなき。左馬頭さまのうし直義ちかよ朝臣あその鎌倉かまくらに帰かへり合戦あせの様ようを申まをせん。為なし將軍しやうぐんの御屋形おんやがたに参まゐり。四門しもん空く閑かんと人ひともなき。體たいくわくか。門かどを敵かたて維まもり有あり。同どう申まをされ。須賀左衛門すかざゑもん出で合あて將軍しやうぐんの矢矧やせきの合戦あせの事ことを聞き召まを候こうひ。より。建長寺けんぢやうじへ御入おんいりりて御出おんで家けり。んと仰おほせらる。を面おもてく様よう申まを止とめて置おき。御元結おんもとむすの切きせ。ひて。い。と。も。い。ま。も。御法おんはふ體たいよ。さ。せ。ま。の。と。申まをる。左馬頭さまのうしを始はじめ。高上たかかみ杉すぎの人ひと。是こゝを聞きて。か。て。の。弥や緒じゆ軍ぐん憑たもを。夫つまあ。へ。し。如何いかへ。せん。と。氣きを痛いためて。夏なつの躰たいを見みる。ふ。惣そう軍ぐんの緒じゆ卒そつ爰こゝか。こ。よ。寄合よしかい落お支し度たを。さ。る。中なかも。て。も。私ひそ語ご々々。天下てんか公こう家けの針はりひ。と。り。ま。ぶ。武士ぶしの世よに。在ある。と。も。不ふ思し皆みな公家こうけの奴やつと。成なて。乞こ食じき内うち前まへ。と。う。べ。し。あ。ら。を。尊うん氏ぢ出でて。軍勢ぐんぜいを。下げ知し。一いつ戦せんを。快こころよく。仕しと。ま。へ。と。は。ぶ。や。者ものも。あ。り。今いま。追お新田しんでん。は。親おや。く。ま。く。今度こんど。當家とうけ。参まゐり。も。頼たのみ。と。思おも。へ。る。新田しんでん。殿との。の。朝敵あそたか。と。な。る。は。し。て。公家こうけ。と。一いつ。つ。よ。ま。り。ゆ。ひ。と。る。故ゆゑ。一いつ。度た。立た。退ひ。て。取と。り。し。又また。足利あしかが。殿との。軍ぐん。立た。拙せつ。く。渡わた。ら。せ。ゆ。へ。り。不ふ如たふ。世よ。を。適たふ。と。び。や。ち。ん。ど。申まを。も。あ。り。さ。は。は。く。心こころ。く。は。申まを。伏ふ。せ。さ。る。中なか。に。も。新田しんでん。は。と。せん。と。云い。者もの。更さら。に。さ。く。是こゝ。を。聞き。く。直義ちかよ。嬉うれ。し。紀き。夏なつ。は。思おも。ひ。さ。て。此こゝ。後軍ごぐん。は。打負うちま。たり。と。も。諸國しよこく。の。兵へい。朝家あそけ。は。隨ま。ふ。ま。じ。ま。心こころ。と。見み。へ。る。但たゞ。し。將軍しやうぐん。を。今いま。出で。し。参まゐ。ら。せん。夏なつ。の。朝恩あそおん。を。こ。も。れ。ゆ。ゆ。成な。る。な。ら。ば。後代ごだい。逆さか。の。嘲あざわ。を。た。ら。ん。と。宗徒しゆと。の。人ひと。く。寄合よしかい。評定へうてい。あり。る。と。上杉うさぎ。伊豆いづ。守まも。重しげ。能の。且かつ。く。思案しあん。して。將軍しやうぐん。縱た。ひ。御出おんで。家け。有あ。り。て。法はふ。躰たい。は。な。る。せ。ゆ。ひ。ひ。と。も。勅ちく。扞けん。適たふ。ら。ま。じ。ま。様よう。を。た。に。聞き。召まを。し。思おも。召まを。直ちか。さ。せ。ゆ。ふ。事こと。あ。ら。無な。く。て。い。へ。も。謀まを。は。論旨ろんし。を。二ふた。三さん。通書つうしよ。て。將軍しやうぐん。は。見み。せ。ゆ。ゆ。の。せ。ひ。ゆ。や。と。被お。申まを。け。ま。は。左馬頭さまのうし。免めん。も。角かく。し。事こと。の。よう。う。ん。様よう。は。計けい。ひ。ゆ。ゆ。と。被お。任まを。たり。る。伊豆いづ。守まも。さ。う。ぶ。と。て。宿紙しゆくし。を。俄はな。に。添出そでだ。し。能書のうしよ。を。撰せん。で。職事しやくじ。の。手て。子こ。少せう。

不違書之其詞曰

足利宰相尊氏在馬頭直義以下一類等誇武威輕朝恩之間所被征罰也彼輩縱雖隱遁之身不可寬刑伐深尋在所不日可令誅戮於有戰功者可被抽賞者論旨如此悉之狀

建武二年十一月廿三日

右中辨光高

武田一族中

小笠原一族中

如此因文章名乗を替と十余通まで出ししりたる左馬頭是と持と急ぎ建長寺へ参りて將軍は對面あり泪を押して被申々々當家勅扨の事義貞が申勸るは依と則新田を討手は被下は間此一門は於と縦令遁世降参の者ありとも求て可誅と議りしり殊は腹慮

の趣も亦同く遁々所はさりたる先日矢矧手越の合戦の時敵の脅北守りに入てひい。論旨ども是御覽以加様は上の遁まの家勅扨とてさつと御出家の思召を翻されと。氏族の陸沈を御助とてと被申々々。將軍此論旨と見と謀書と思ひもよ。叔叔誠は一門の浮沈此時とていさ。無力尊氏も旁と共弓矢の義を專らして義貞と生死を争ふと。忽ち道服を脱ぎ綿の直垂は召替被申々々。此時鎌倉中の軍勢ども一束切とて鬻を短くしり將軍の鬻を給らるるが為ありけり初こそ事叶はして京方へ降参せんじたる。緒大名右往左往は落行人とほ軍勢も先は新田は降参しり。佐々木佐渡入道も亦俄は氣を取直して馳参けり。一日もさして其勢五十万騎は成はけり

兩軍大戦箱根竹下

搦手破大友塩冶變心

去程は鎌倉の諸將軍評定あつて將軍は箱根より向ひ直義へ竹の下へ向ひまんとり何事も此義の内より赤松筑前守申々の何方へ
 たり兵新田が大勢もて向へん所へ直義御向ひ有て要害を前も當
 て是を防ぎ義助小勢もて向へん所へ將軍大勢もて御向ひ有と御合
 戦はる。自定御方の勝とこそ存り元弘の戦ひの時我等が二類京中
 少て戦ひし時父もては圓心京もては則祐もて向ひは所へ六波羅國
 國の勢を指懸懸出て不戦被攻て陣を破らまざるを勝と殿法印良
 忠中院定平もどか被向ひ伏見木幡へ。何野陶山等の宗徒の
 兵を出して定平良忠が兵を打破てまて横合は圓心某則祐が
 陣もかりしは依て御方利を失ひ侍る。箱根竹の下何事も難所もて
 能要害たり新田が越ん所を直義堅固に守り給ひと戦半成んじ
 る小將軍義助を追散しあつて義貞が堅陣もともは利を失へしと

こそ存さるへと申々も尊氏直義を始高上杉仁木細川に至る迄
 實は以て可然に直義の御陣より出て戦ひひそとて俄は引替と
 將軍へ竹の下直義へ箱根へぞ被向たる此間度々の合戦は打負たる
 兵ども未ど氣を直さばして不勇昨日今日馳参りくる勢は大将を待
 て猶預しける間敵己は伊豆の府を打立と今夜野七里山七里を越
 ると聞へる足利尾張守高経舎弟式部太補三浦因幡守土
 岐弾正少弼舎弟道鎌佐々木佐渡判官赤松雅樂貞則が様は
 目くくして鎌倉は集り居て六叶あはし入の夏ははし免も角もりま
 り先竹の下へ馳向く。後陣の勢の著ゆ先は敵寄バ一合戦しと
 討死せんとして十一日まで宵ある。竹の下へ馳向ふ其勢僅なりしは物
 淋しくぞ見えたり。竹の下の義を専らして心を一致するまは強ち多
 少は不可依連竹の下へ打義て敵の陣を遙は直下しるも西へ伊豆

の府東ハ野七里山七里は焼双ぐる篝火の數幾千万とも不知なる
 晴天の星の影滄海は移が如くたり。さうば御方も篝を焼せんとも
 雪の下草打拂ひ所々川集り幽火を吹付たまふ。斐山の茂見が下
 夜を明も照射の影も不異さきども武運の強りまはる。敵今夜
 ハ寄来らる夜已も明なんどし。時將軍鎌倉と打立せまらる。仁
 木細川高上杉是等を宗徒の兵とて都合其勢十八万騎十月
 十一日竹の下へ著ぬ。バ馬頭直義六万余騎もて箱根峠へ着まらる。
 明も二十日辰刻は官軍ハ伊豆の府もて手合して竹の下へ中務
 卿親王ハ御相雲客十六人副將軍ハ服屋義助。細屋右馬以堤卿律
 師大友左近將監鹽治判官高貞を相添て已上其勢七千余騎搦手
 よぞ向とまらる。箱根路へハ又新田義貞宗徒の一族二十人千葉宇都
 宮大友千代松丸菊池松浦黨を始とて國々の大名三十余人都合

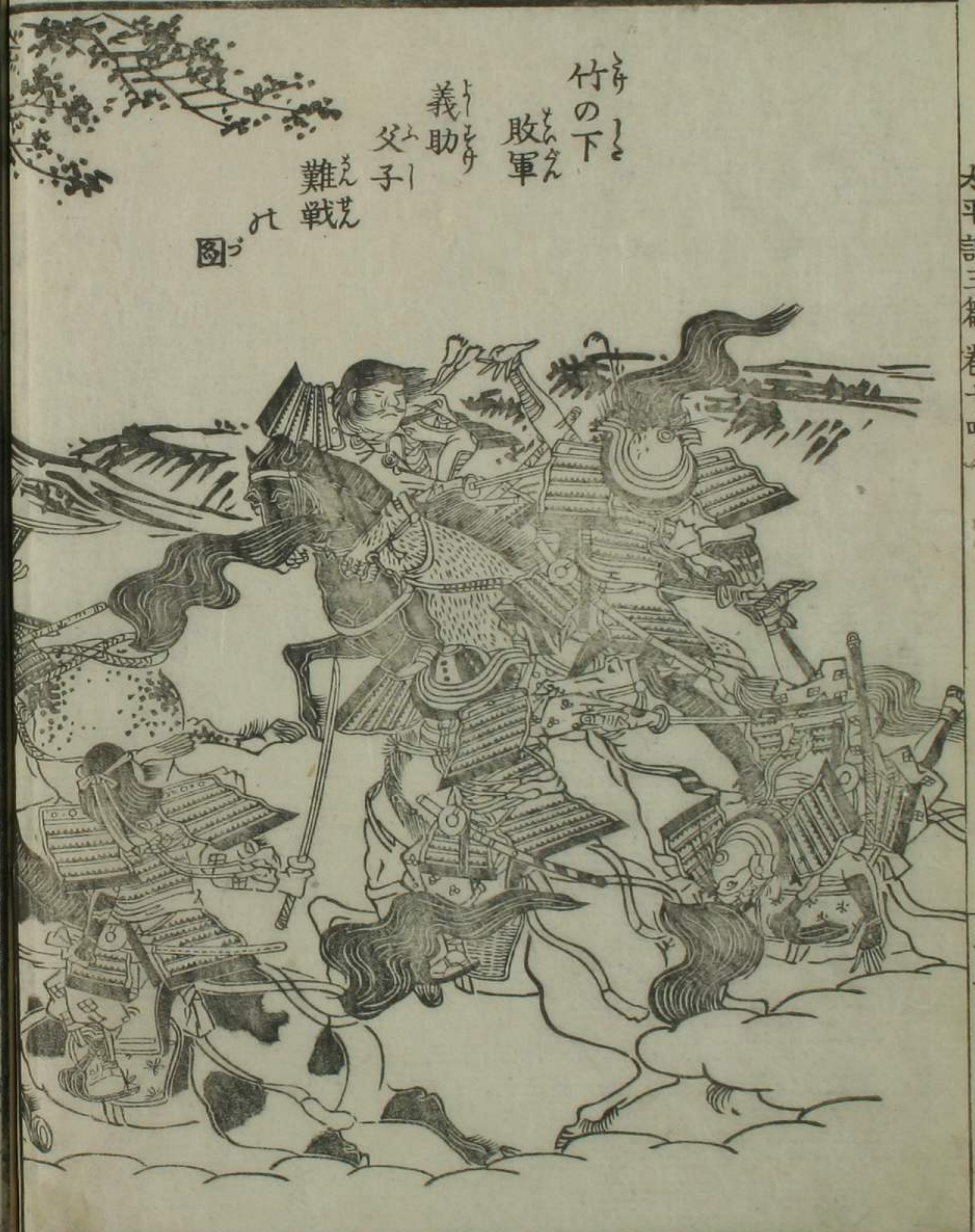
其勢七万余騎大手よぞ被向らる。日午の刻は軍始りし。バ大手搦
 手敵味方互に岡を作らる。山川を傾け天地を動し叫喚んと責戦ふ。
 宇都宮先陣は進らる。菊池肥後守武重松浦黨の佐志藤七郎
 田平左衛門申らる。矢矯もて新田の人ハ手を礎て戦も待らる。鷲
 坂手越もて千葉宇都宮の人ハ一戦も利を得らる。今日の先懸ハ他
 人ハ赤も間敷もて侍と謂ハ公綱も笑く。西國の朝敵追討ハ案内
 者ちも六九も有らん。東國の内ハおいら公綱ハ在ん程ハ先がけも
 西國方の者もハさきも間敷もてと云ハ武重大腹をくく。西國方
 の者どもの東國の地は至と軍もまはる。所謂ハ足利ハ先陣ハ東國
 がこの者もぞ有らん。ちも敵の先陣も其罷向と打破く。こも御目
 ようけへ。少も公綱の勇ハ我等の客りたり。事侍らる。こと申も公
 綱亦腹もくく。己ハ事出来ちんとせ。を船田入道両方をちどめ

義貞は此事を披露すと義貞菊池の人の申されは其子細あり
 公綱の數度の先づ仕方よ今日の先懸は菊池殿松浦殿は預申さ
 んとより又勇武の輕重のこと維く誰は劣人と思ふ者侍るまう
 きぞ殊は公綱の更は勇武の誉一天下無隱菊池殿の御更は九州二
 嶋のうちよ於る菊池嶋津とて勇の誉是又日本一州は人の知る所
 さわりの名將達の悪くも勇武の勝劣を争ひぬふ者哉と耻らるる
 人實もとや思ふん静まりぬ去は菊池先陣宇都宮へ二陣は在る九
 國の軍見く習んと云は菊池の見ゆへ目を覚せんをぞと謂ふとふ
 や此故は菊池松浦のめども敵の陣を破らむん生とて歸らんと
 謂は打寄ると等しく矢の二ツも射まは抜連とかを敵陣の一段
 高き所は細川吉良の一族二手よ分て細川三千余騎をひくると西
 へ懸入たるは細川志をく支と戦ふとも亂騒を吉良右京が陣と

一ツは成人と引上るを菊池松浦息をも不續責上てくれは吉良の陣は
 追立ては嶺は陣を取て味方の勢は北加る宇都宮菊池が陣へ使を
 立只今の御行跡りゆめしくい次の陣を此方へ御渡りゆくと菊
 池松浦の両勢合と三千も足らざりぬ兵疲むたぬは手
 負を助よをも公綱は渡りたる去る程は千葉宇都宮川越高坂
 愛曾熱田大宮司一勢は陣を取て曳や聲を出して責上りて叫
 喚んと戦ゆる中も道場坊助注記祐覚の兒十人同宿三十余人
 紅下濃の遣を二様は着て兒は紅梅の作て花を二枚づ甲の真額は挿
 りるるが指は外まを一陣は進とるるを武藏相摸の荒武者とも見
 ともいふも只射よとて散るは射るるる面は進とるる兒八人矢よ
 又倒して小篠の上よぞ伏るるる黨の者ども是を見と首を取ん
 と抜連と打て下りるるを道場坊が同宿共兒を打せとて三十余

人太刀長刀の切先を双べと手負の上を飛越々々坂本様の袈裟切は
 成佛せよと云まゝに追攻々々切と廻り當の敵散々切立らんと北
 なる峯へまると引く且し息をぞ継りたる此隙は祐覚が同宿面
 の手負を肩より引りけと麓の陣へぞ下りたる義貞の兵の中は杉原下
 総守高田薩摩守葦堀七郎藤田六良左衛門川波新左衛門藤
 田三郎左衛門同四郎左衛門栗生左衛門篠塚伊賀守難波備
 前守河越参河守長濱六良左衛門高山遠江守園田四郎左衛
 門青木五郎左衛門同七郎左衛門山上六良左衛門とて黨を結
 する精兵の射手十六人あり一様は笠印を付て進むも門く進
 退くも亦共は退りたる世の人此を十六騎が黨とぞ申りたる彼等
 が射るる矢も楯も物の具もたぬらりり乃び向ふ方の敵を射と
 りせびとつと夏あき。執事船田入道の士卒を勇め大將軍義貞朝臣

一段高き所は諸卒の行跡を實檢有ぞ何も忠を励むべしと呼い
 る馳廻る名を重し命を輕なる千葉宇都宮菊池松浦の人々
 勇に進んぞ戦ひ乃ち兼倉勢馬の足を立兼と討る者數を去
 らざ唯陣營を堅く守て様子を相待り此時竹の下へ向をまて
 中書王の御勢諸庭の侍北面の葦五百余騎恐は武士は先をかけ
 られどとぞ思らん綿の御旗を先に進め竹の下へ押寄て敵いまで一
 矢も不射先は一天の君は向ひ奉て拽弓放矢者豈不蒙天罰や命
 惜くは脱甲降人は参ると声く呼りたる是を見と尾張右馬頭
 舎弟式部大浦土岐彈正少弼舎弟道兼三浦因幡守佐々木佐
 渡判官入道赤松筑前守貞則胷より一陣は在るが敵の馬の立や
 り旗の紋京家の人と覺るぞ遠矢な射そ只技はと懸ととて
 三百余騎嚮を双べと先は進も弓馬の家は生まてり者名をこそ



竹の下
敗軍
義助
父子
難戦
図

惜め命を惜みぬものを云所虚度り。實り戦々手並の程を見たり
 と一月又周をどつと奉喚ひとつと懸りつる。官軍の敵を益々受と
 麓又扣へる勢あるに何れ一隊も可憐一戦も不及して捨鞭を打て
 ぞ引りつる。是を見り土岐佐々木一隊は進んぞ言まを似ぬ人々
 なまきつて返せと取めり追立々責りつる。後引官軍五百
 余騎或ひは生捕とあるに被討残り少なる成なり。手合せの合戦
 を仕違つて官軍漂ひて見へるに仁木細川高上杉の人々勇を進ん
 ぞ中書王の御陣へ會釈もなぐ打てかろ引漂ふる。京勢可叶様
 もつらつらつら中書王の副將軍服屋義助大は怒り云甲斐を死
 者どもが懸一陣は進んぞ御方の力を失ふこそ遺恨ある此敵を散
 さで叶ふはとて七千余騎を一手はたす。馬の頭を雁行に連て
 くの足を龍粧は進め横合は閑とかがらるる。勝誇るる敵をれむ

何れ少くも疼む千文字は合と八文字は破り大中黒と二ツ
 引両と二ツの旗を入替と東西は靡き南北は分と万卒は面を
 進め一挙は死をぞ争ひつる。誠は両方は名を知て兵どもは
 維る獨も可道互は討つ討つ馬比蹄を没と血は混とと供河
 の流る如く死骸を積る地は累とと屠所の肉林はひとと無
 懸といふと疎るる。爰は服屋右衛門佐の子息式部大輔義治とて
 今年十三歳なりつるが敵味方引分はつる時如何して紛まてけ
 ん郎等三騎相共は敵の中をぞ残るる此人幼稚も心も心早
 き人にて笠印引切と投捨髪を乱し顔はくけり。敵は不被見知と
 騒がぬ躰にてぞ御座りつる。父義助是を不知義治が見へぬに討まぬ
 ろろ又生捕まぬる二ツの間を離れ彼が死生を見む六片時の命生
 ても何れもなき勇士の戦場は命を捨る度只これ子孫の後榮を

思ふ故あり。さればいふも幼少身なまじも、（いふ） 庁時の別をを悲んぶ。此戦
 場も伴ひつらり。其死生をあらうて、如何さて有べきとて、（いふ） 禮の袖
 は涙を流されたる親の子を思ふ志。今も初め更るれども、哀なる御更
 うなひや、御供仕人と義助の兵ども、豊を双へ切先を揃へく三百余騎
 主を討せどとかけ入る。義助の二度のうけよ、（いふ） 大勢戦ひて
 一度よむつとぞ引りたる是も利を得て、義助北を追て進まざる處
 よ式部大輔義治我父と見まして馬を引返し、主従四騎もて父の殿よ
 馳逢と馬を進めらるる。誰とよあしむ片引兩の笠符付る兵二
 騎味方が返るとあつ終得てやさしく見へき、（いふ） 御供申て
 討死りのんとて引添く是も返りたり。式部大輔義治父の勢の中へつ
 と駈入るぬ。郎等よまろと目くせ、（いふ） 務らるる。義治の郎従よせ
 合て續ひ返りつる二騎の兵を馬より下は切て、（いふ） 落し首を取てぞ

指上する義助これを見て死する人の再び蘇生しする心地して悦びの
 涙袖をあらりて、今一涯の勇を成し且く人馬の息を休めよとて、元の陣
 へぞ引返され戦ひくくびし。荒手を入替て戦つんと被思たる如
 く大友左近將監佐々木塩治判官等千余騎もて、後引へるが如何
 思ひたる一矢射て、後旗を捲て將軍方よ馳加たり。却る官軍を散く
 よ射る中書王の御勢、初度の合戦よ若干討まると又も戦まると右
 衛門佐の兵、兩度の合戦よ人馬疲まると無勢あり。是ぞ荒手よて
 一軍も仕つづき者と憑まると大友塩治を忽ち又も翻て親王よ向ひ
 奉て弓をひき、（いふ） 服屋右衛門佐よ懸合て戦ひし。官軍争り可憐
 敵の後を遮ぬ前よ大手の勢と一手よ成んとて、佐野原さして引退く。
 仁木細川今川荒川高上杉武藏相摸の兵ども、三万余騎もて追り
 けり。是もて中書王の股肱の臣と憑を思召りたる二條中将爲

冬御討まのひりくろ六服屋右衛門佐の兵ども返合と三百余騎所
 所もて討死を是をも顧を引立たる官軍共我先を落行り程
 一佐野の原ももくまり得を伊豆の府もも支むとて搦手の奇手
 三百餘騎の海道を西へ落て行義助も心の矢猛くやりたる共敵と
 大勢く佐野原伊豆の府横瀬川浮嶋が原其外所くもて郎徒數
 多討せて父子十騎をりも成て遠州の府へぞ退き申されたり嗚呼
 義助二度の懸とふもりせぶ多くの郎徒の被討まもき者也繼々大
 友塩治變心を成とも義助此場を喰止てかゝる敗軍も及ぶはま
 者とも是天運の然ともしむ所欽楠の先言爰も於て實あるをまば

南北太平記圖會卷之十四上終

直義重能、逆賊何能為
 君為家偽書造、尊氏賊為
 能計具事後世、人口惡
 惡南北太平記



